

# 湾岸戦争週報

## もう一つの目

No. 1  
91. 2. 15

責任編集：梅林宏道  
発行：トマ喰い虫社

連絡先：電話 045-563-5101 FAX 045-563-9907

### 「国際的貢献」

湾岸危機を契機に「国際的貢献」という言葉が、日本の政治のキーワードのように語られ始めた。湾岸戦争が始まって、その傾向は一層強くなっている。この言葉によって日本政府が意味しているものは、第一義的には多国籍軍に対する協力であろう。

しかし、ことはそんなに単純ではない。90億ドルがそのためのものであることは間違いないが、自衛隊機を難民輸送に飛ばそうというのではなく、多国籍軍に何ら貢献しない。ねらいは全く別のところにある。また一方で、9

0億ドルにだけ気を取られていると、日本政府が多額の経費を払っている在日米軍基地が、すでに湾岸戦争に多大な「貢献」をしている、もう一つの事実を見落としてしまう。

湾岸戦争を契機に語られ始めたこの言葉を、ウサン臭いとして片付けてしまうよりも、たっぷり付き合うことを提案したい。日本の「国際的貢献」を検証するいいチャンスである。「一国的平和は許されるのか」（市川雄一公明党書記長、2月5日衆院予算委員会）という問いかけには、多くの日本人が共感する。「一国的平和」への反省が「世界的平和」につながるのか「世界的戦争」につながるのかが、私たちの課題である。

### 在日米軍の動き

湾岸戦争に在日米軍基地は活発に動いている。イラクがクウェートに侵攻した8月2日以来、在日米軍は新しい体制に入った。

その状況を、最も早くキャッチしたのは、米海軍上瀬谷通信基地を監視している「ウドの会」（ウドは基地に土地を取り上げられている農民が始めた特産物）のメンバーである。彼は、その日を境に基地のアンテナの一つが太平洋からインド洋に向きを変えたことを確認した。

在日米軍基地の中で、最も早く湾岸に兵を送ったのは、在沖縄の第3海兵遠征軍である。8月7日から8日にかけて嘉手納空軍基地の輸送機に乗りこんだ。在日米海軍の第一陣は、

横須賀を母港とする第7艦隊の旗艦ブルーリッジ（司令官ヘンリー・H・モーズ中将）であり8月14日に横須賀を出航した。ブルーリッジは米中東派遣軍海軍部隊の旗艦となった。在日米空軍の第一陣は、おそらく沖縄の嘉手納基地の第961空中警戒管制飛行隊の空中警戒管制機（AWACS）であろう。イラクの奇襲に備えるために一日も早く一機でも多くのAWACSを必要としていたからである。8月8日にAWACS 1機が姿を消したことが確認されている。

以来、在日米軍基地は戦争に向けてフル回転を開始した。その活動は次の3分野に大別される。

①戦闘部隊の出動 沖縄、岩国、岩国、横須賀の空母ミッドウェーとトマホーク発射艦など、攻撃の中心部隊が、日本の基地から



鳥町)で検査を終えた弾薬が海路、一般船舶の航行を止めて運び込まれていた。1月20日夕方にトレーラー3台、21日にトレーラー4台の弾薬が広を出発して佐世保港に向かった。佐世保港ではそれぞれ21日、22日に第一陣、第二陣の積み荷が到着した。それらはコンテナのまま24日朝、クリープランドに積み込まれた。クリープランドはその日の夕方出航した。ちなみにコンテナにはA P L、A P Cの略記がなされていた。(以下の相模補給廠の項目を参照)。

高度の弾薬類を扱う秋月弾薬庫から送られたものが何であるか関心が高まったが、2月8日米軍筋が「敵レーダー波に障害を与える空軍用兵器」(「中国新聞」2月10日)と説明し、軍事的には「チャフ」と呼ばれるものであることが明らかになった。直接、形状が明らかにされていないが、監視者の報告を総合すると弾薬と言うよりもロケット弾であり、空中で軽金属を爆発散布させ、敵のレーダーを攪乱してミサイルから身を守る電子戦防護兵器(ECM)であろう。この種の兵器は、海軍も持つておらず、電子戦では最も標準的な兵器である。ハイテク戦争と言われる湾岸戦争に日本から大量のECMが補給されたことは興味深い。

相模補給廠では湾岸危機以来、昨年の8月、10月、12月に大量のコンテナ搬出があった。12月中旬にはベトナム戦争以来という規模で医療用物資や車両が運びだされた。最近、在日米軍司令部が神奈川新聞社の質問に答えてその中身を明らかにした。運んだのは460個のコンテナと30個の発電機、約60台の車両であり、行く先は横浜ノースドック経由で「砂漠の盾作戦」、コンテナの中身は、前もって保管していた500ベッド数艦隊病院用物資であった。米軍発表と異なり、実際の積み出し港は横浜本牧埠頭D突堤であるとの報告がある。

湾岸戦争勃発以後では、1月23~26日に大型コンテナ(米国の海運業者A P L=アメリカン・プレジデント・ラインズ、その親会社A P C=アメリカン・プレジデント・カンパニー所属)140個が相模補給廠から横浜本牧埠頭D突堤に運ばれた。新聞社機は、コンテナの中身の大部分が大量の波型鉄板であることを確認した。戦場の構築物の資材であろう。積まれた船はプレジデント・タフト号、プレジデント・グランツ号である。

相模補給廠からは、横田基地経由で空路湾岸地域への補給も行なわれている。相模補給廠監視団は2月3日、7台のトラックで段ボール箱が搬出されるのを目撃したが、ラベルから段ボールの総数は180個であり、行く先は横田経由ダーラン(サウジアラビア)であることが判明した。中身は不明である。

#### ■戦闘部隊 2. 空母ー1

## 退役直前の参戦 空母ミッドウェー

日本から中東に出動した最大の戦闘集団は横須賀を母港にする空母ミッドウェーである。搭乗する第5航空団を含めて、約4500人を擁する。

空母ミッドウェーは今夏退役し、サンジェゴを母港にしているインデペンデンスと交替するという発表が、一年前になされていた。退役直前のミッドウェーが、今回の中東派遣を命ぜられたのがいつであるか判然としない。横須賀を出航したのは10月2日であるが、乗組員には湾岸行きは知らせられなかった。北海道近海での海上自衛隊との共同演習を終えた10月12日に公式の湾岸行きが告げられたという。6カ月の通常の任務期間を仮定すると、予定通りの退役には間に合う。現在のところ予定通りの退役説が強い。